

ニヤン太郎とふしぎな運動会

喜界町立志戸桶小学校 四年 向井 結子

「うにゃー。今日が終わってしまうにゃあー。」

今年の夏、ニヤン太郎は、ちよつとあせつています。一ぴき足りなくて出られそうにないからです。何に出られそうにないのかというと……。それは、う・ん・ど・う・会。そんなんです。夏の終わりに開かれる、動物たちによる、動物たちのための運動会がせまつているのです。しかも、明日なんです。

白くて長いしっぽをゆっくりふりながら、公園のどかんの中でせなかを丸めて考えていました。すると、人間の女の子がどかんの上にすわるのを見えました。なんだか悲しそうです。

「ああー。夏休みが終わったら運動会かあー。」
と、言いながらため息をついています。

この女の子も、どうやら、運動会の事でなやんでいようです。

「運動会が好きになれたらどんなにいいか。」
と、女の子はつぶやきました。

「じゃあ、おいらが手伝って、好きにさせてあげるにゃあ。」

女の子は、とつぜんの声におどろいてとび上がりま

した。ふり向くと、目が青くて、真っ白な毛のねこが、しっぽをぴんと立てて、ちよこんとすわっているではありませんか。

「ねえ、運動会がきらいなの？それならおいらたちの運動会が明日あるから、いっしょに行ってみない？きつと好きになると思うにゃあ。あつ、おいらニヤン太郎、よろしくね。ふしぎな力を持ってて、人間と話せるんだにゃあ。どう？おいらと行こうよ。」
女の子は、動く事が出来ません。これは、ゆめか、現実か！しばらく考えてから、やつと話しはじめました。

「行ったら、本当に運動会が好きになるの？」

「もちろんだにゃあ。ぜつたい楽しくて、好きになるよ。じゃあ明日の朝早くここに来てね。待ってるにゃあ。」

「わかった。好きになれるなら、どこへでも行くわ。わたしはナオよ、よろしくね。」

ナオのうれしそうな顔を見て、ニヤン太郎はにやつとわらいました。何か考えています。

「にゃはつ、やつとそろつたぞ。これで運動会にも出られるし、ナオも楽しんでくれれば、一石二鳥だ。おいらつて頭がいいにゃ。」

ニヤン太郎は、しっぽをふりふりしました。

次の日の朝早く、ナオが公園へ行くと、ニヤン太郎が手まねきをしながら、どかんの中へ入って行きました。

ナオもあわてて後からついて行きました。真つ暗でせまいどかんの中を、ねこのように四つ足で進んで行くくと、ニヤン太郎の声が聞こえてきました。

「レーナニコネ、レーナニコネ、プンブン。」

急に目の前が明るくなったかと思うと、そこは、ねこじゃらしがたくさん生えた野原でした。立ち上がるのと、その向こうには、広いグラウンドが見えています。

「ここは動物の国だよ。今日は運動会だから、ナオもねこのすがたになっっているんだよ。実は、一ぴき足りなくてこまってんだ。お願い、ナオ！ぼくたちのチームに入つて、運動会に出てほしいんだ。」

と、とつぜんのお願いにナオはびっくりしました。ニヤン太郎のような白い毛のねこに変わってしまったうえに、見るだけだと思っていた運動会に出てほしいと言われたのですから。

「だめだよ。わたし出たくないわ。走るのはおそいし、去年の紅白リレーでバトンを落としてしまって、ぜんぜん自しんがないよ。ここでも、リレーがあるんでしょ？」

「あるけど、一度しっばいしたくらいで、自しんをな

くしちやよくないにやあ。転んでも、バトンを落としても、最後まで一生けん命に走ったり、バトンをわたしたりすることが大切だと思うよ。みんなが力を合わせないとリレーはできないでしょう。ナオがないとできないんだ。他のしゅ目も、運動会でできないものばかりだから、参加しなきゃそんだよ。うまくできないからつてあきらめるより、何度もちようせんして、できるようになればいいんだよ。いっしょにがんばろうよ、ナオ！」

ニヤン太郎にはげまされて、ナオは参加しようと思めました。

グラウンドには、犬、しか、くま、ぶた、りすなど、たくさん動物がいて数えきれません。みんな仲よく、ひさしぶりだねえ、がんばろうねえ、などと話していました。

ニヤン太郎がナオをチームにしようかいうと、みんな大よろこびでむかえてくれました。チームは色別に分かれていて、ナオたちは水色チームです。

動物の運動会は、とても楽しいしゅ目ばかりでした。目かくしをして、においをたよりにしてパンをさがすきょうそう、長いヘビを引っばるつな引きは、ぬるぬるしてすつてんころりん、一番楽しかったのは、アメ食いきょうそうのように水に顔をつけた後、まほうの粉

の中にかくれた自分の好きな食べ物を口でさがすしゅ目でした。まちがった食べ物をくわえると、その動物の顔になってしまうのです。馬さんは、まちがってバナナをくわえてしまって、さるの顔になってしまったので、みんな大ばく笑でした。

でも、ニヤン太郎は、そわそわしています。ナオが気になってたずねると、何とニヤン太郎は顔を水につけることがこわいというのです。ねこは水が苦手だったのです。

今度はナオがニヤン太郎を上げました。

「大じょうぶ。ミルクだと思って顔をつけてみようよ。

わたしもリレーがんばるから、ねっ。」

ニヤン太郎はうなずくと、しつぽをさか立てて、ものすごい速さで走って行きました。いよいよ水の前まで来ました。ニヤン太郎は、ナオの言ったようにミルクだと思って顔をがばつとつけました。そして、大好きな魚をくわえて帰って来ました。ニヤン太郎の顔は粉だらけでよく見えなかったけど、とてもうれしそうでした。

とうとう最後の動物リレーになりました。アンカーはナオです。むねがどきどきです。

「やっぱり苦手だよ。負けちゃうかも。」

「負けてもいいにや、あきらめないでがんばれば、苦

手でも楽しく走れたって思うにや。」

「うん、がんばる！」

ナオは、犬からバトンを受け取ると、思いっきり足を高く上げて走りました。みんな、がんばれと大声でおうえんしています。風が体中にあたってとても気持ちよくなりました。そして、ナオは、ゴールのテープをきりました。水色チームが一位になったのです。

「ばんざーい。ばんざーい。」

ナオはうれしくとび上がり、みんなといっしょによるこびました。

「ニヤン太郎ありがとう。自しんがついたよ。学校の運動会もあきらめないでがんばるよ。」

「うん、おいらもありがとう。ナオのおかげで、参加できたし、水もこわくなかった。あきらめないでよかったにやあ。」

ナオは、水色チームのみんなと、最後まで力を合わせて、運動会を楽しむ事ができたのです。

運動会が終わり、ねこじやらしの野原にもどって来ました。楽しかった事を話しながら、二ひきはどかんの中に入って行きました。

「レーナニトヒ、レーナニトヒ、プンプン。」

どかんをでると、ナオは人間にもどっていて、ニヤン太郎はどかんの中でしつぽをふりながら、かた手を

上げて、ばいばいをしていました。ナオも手をふって、ばいばいをしました。それから、ニヤン太郎が言っていた、

「あきらめないで、最後までがんばる！」

という言葉をくり返し言いながら帰って行きました。